

東南アジアの陶磁

研究の現況と視点

Southeast Asian Ceramics:
The Current Situation and Perspective of the Study

矢島律子

① 東南アジア半島地域の陶磁に共通する二、三の問題

② 研究の現況

③ 大壺について

【論文要旨】

東南アジア陶磁の研究はここ数十年の間に飛躍的に進歩した。最近の研究は現地研究者が自国の歴史研究の一貫として、陶磁研究を積極的に行っている点に特色がある。新たな研究分野としては、カンボジア国内におけるクメール陶器の古窯址調査やビルマにおける古窯址調査があり、ラオス陶磁にも関心が向けられている。ベトナム陶磁やタイ陶磁の研究の歴史は長いですが、近年では科学的な窯の発掘調査や沈船の調査が加わり、陶磁史の多くの空白が埋められると同時に、新たな問題も提起されている。1998年に国立歴史民俗博物館で行われた「第27回歴博フォーラム『陶磁器が語る日本とアジア』」は、東南アジア陶磁研究に今後必要とされるはずの、陶磁史研究における重要な視点を提示したものであった。

そこで提示された「消費地における貿易陶磁の社会的な意味」という新たな視点から見ると、「マルタバン・ジャー」は興味深い存在といえる。日本で安土・桃山時代以来高い権威を持つ茶道具として伝世してきた「呂宋壺」は、13～14世紀を中心に南中国で焼造された褐釉四耳壺であるが、広い意味ではこの「マルタバン・ジャー」に含まれる。マルタバン・ジャーは少なくとも17世紀においては非常に高値で取り引きされていたが、これは、単なる実用本位の壺として評価されたためだけではない。インドネシアやフィリピンでは、神が宿るものとして特別視され、また儀式では共同体意識を高めるための重要な道具として使われた。こうした大壺は家の財産として重視され、単に大壺を所有することが、持ち主の社会的立場を高めることに結びついていた。従来、日本における「呂宋壺」の高い評価というものは、日本独特の侘茶の美意識によって生まれた、特異な現象とされてきたが、背景には東南アジア島嶼部に広まっていた、象徴性の強い大壺の在り方が控えていたのではないだろうか。